

注意報発表中の斑点米カメムシ類の発生が引き続き多くなっています

斑点米カメムシ類の防除を徹底しましょう！

～斑点米の発生を防ぐためには、乳熟期以降の防除が重要です！～

[現在の発生状況]

- ① 8月上旬現在、水田における斑点米カメムシ類の発生地点率は52%と平年(22%)より高く、10回振りすくい取り虫数は1.8頭と平年(0.5頭)より多い(図)。病害虫発生予察注意報第4号(7月20日)発表以降も7月下旬と同様に発生量が多い状況が続いている。
- ② 本年のクモヘリカメムシの産卵時期は、平年より早い。8月上旬現在の幼虫の発生割合は、平年より高い(表1)。
- ③ 8月上旬現在の水田における発生種は、クモヘリカメムシ(写真1)が中心であるが、イネカメムシ(写真2)やアカスジカスミカメの発生量も平年より多い(表1)。特に、クモヘリカメムシは県北・県央地域において、イネカメムシは鹿行・県南地域において発生量が平年より多い(表2,表3)。



写真1 クモヘリカメムシ幼虫

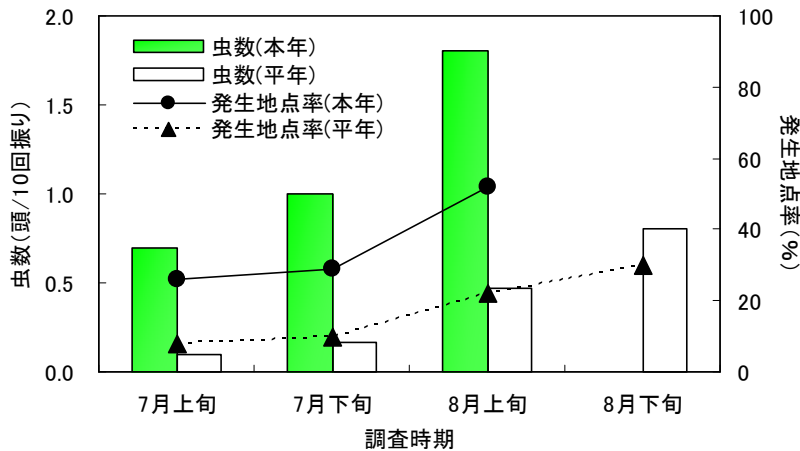


写真2 イネカメムシ幼虫

図 水田における斑点米カメムシ類の発生地点率及びすくい取り虫数の推移(平年:平成13~22年までの10年間の平均値を示す)

表1 水田における斑点米カメムシ類の種類別生息状況(平成23年8月上旬調査)

カメムシ類の種類	すくい取り虫数(頭/10回振り)						順位 ²⁾
	本年			平年 ¹⁾			
	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	
クモヘリカメムシ	0.20	1.16	1.36	0.13	0.20	0.33	1
ホソハリカメムシ	0.03	0.02	0.05	0.02	0.01	0.03	2
イネカメムシ	0.01	0.16	0.17	0.01	0.01	0.02	1
アカスジカスミカメ	0.09	0.07	0.16	0.04	0.01	0.05	1

1) 平年:平成13~22年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における成幼虫数合計の本年値の順位を示す。

表2 水田におけるクモヘリカメムシの地域別生息状況(平成23年8月上旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (9)	67	20	1	3.3	0.7	1
県央 (15)	47	19	1	2.2	0.4	1
鹿行 (6)	67	27	1-2	1.3	0.8	3
県南 (19)	16	9	4	0.4	0.1	1
県西 (9)	11	2	2	0.2	0.1	2
全県 (58)	36	14	1	1.4	0.3	1

1) 平年:平成13~22年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(1-2は1位から2位まで同じ数値であることを表す)。

表3 水田におけるイネカメムシの地域別生息状況(平成23年8月上旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (9)	0	0	1-11	0	0	1-11
県央 (15)	0	0	1-11	0	0	1-11
鹿行 (6)	33	2	1	0.2	0.0	2
県南 (19)	26	3	1	0.5	0.1	1
県西 (9)	0	0	1-11	0	0	1-11
全県 (58)	12	1	1	0.2	0.0	1

1) 平年:平成13~22年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(1-11は1位から11位まで同じ数値であることを表す)。

[防除対策]

- ① 斑点米の発生を防止するためには、乳熟期以降の幼虫密度を低下させることが重要である。カメムシ類の発生が多い場合には、穂揃期の防除だけでは不十分なため、出穂 10~15 日後頃に幼虫を対象に防除を実施する。
- ② 収穫の遅い水田では、新成虫の飛来によりカメムシ類の密度が高まることがあるので、発生には十分注意する。
- ③ 今までに薬剤散布をした水田でも、その後孵化した幼虫や新成虫の飛来によりカメムシ類の密度が増加している場合がある。このため、引き続き発生に注意し、発生状況に応じて追加防除を行う。
- ④ 防除薬剤は表4を参考にする。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

表4 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成23年8月3日現在)

薬剤名	希釈倍数(倍)	収穫前日数- 剤の使用回数	有効成分- 有効成分の総使用回数
アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	2,000	7-3	ジノテフラン-4※
キラップフロアブル	1,000~2,000	14-2	エチプロール-2
MR. ジョーカーEW	2,000	14-2	シラフルオフェン-2

※ 但し、育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内
注1) 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ、周辺作物への飛散に留意して使用する。

注2) 育苗箱施薬、有人ヘリ防除または無人ヘリ防除を行っている場合は、本剤の使用回数ならびに有効成分の総使用回数に十分注意する。